グリーン・ツーリズム実証実験の結果考察
―家庭内供給的小規模農業展開論Ⅳ―

深　澤　竜　人

はじめに

筆者の自説・持論としての「非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業展開論」を、『経営情報学論集』から継続させて本誌に出していくのは、今回で四回目である[1]。今回はそうした家庭内供給的小規模農業展開論のさらなる展開として、表題にある「グリーン・ツーリズム」（援農を兼ねた農作業体験・旅行）に関して、希望者が多く出たこともあって、その実証実験的な実践活動が可能となった。

本稿ではその実証実験の結果を示し、このようなグリーン・ツーリズムの活動・行動、さらには家庭内供給的小規模農業が有するさらなる発展と展開について、考察を深めていくこととする。

Ⅰ．自説・持論「非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業展開論」と、グリーン・ツーリズムとの関係

1．自説・持論「非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業展開論」の実践活動を含めた簡単な紹介

まず最初に、ここでは筆者の自説・持論としての「非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業展開論」に関して、筆者の実践活動を含めた簡単な紹介を行なっておいた方が良い。それは以下のとおりである[2]。

筆者は山梨県昭和町で小規模農業を片手間に行なっている者である。田んぼが約6a（3aが2ヶ所）、畑が約3a、このような小規模での農業である。本業は大学などで講義・研究を行なっている者である。さしづめ半農半X（Xは教員・研究者）となろうか。

こうした片手間での小規模な農業であるから、化学肥料や農薬を使わずに、エンジン付きの農業用機械も使用せずに行なえている。トラクターはもちろん、軽トラックもなく、あるのは普通の軽自動車である。専ら手作業・人力で農作業を行ない、畑の肥料は手作りの堆肥やボカシを使用している。種も自家採取できるものは、それを活用している。

これによって必要な経費・費用は、慣行農法と比べて非常にわずかとなっている。無農薬で田んぼは自然農法、畑は有機農法的に行なっている。そのため、収穫したお米などは欲しいという方に自家消費以外の分をお分けし、その収入で必要最小限の農業用資材や、地代を工面している。収支計算とすればトントンであり、結局、農業を行なうのに出るお金がなくなっている。

田んぼの米づくりは「不耕起」であるが、一般に知られている「冬水田んぼ」ではない。しかし耕運・代掻きはしたことはなく、トラクターいらずである。通常稲作では耕運・代掻きをしなければ、土が固く稲の苗は植えられない

[1] 深澤［2011, 2012, 2020］を参照。また同時にそのほかの筆者の文献も参照されたい。

[2] 以下、深澤［2023］を基に加筆した。

のであるが、不耕起栽培を続けていると土が軟らかくなり、刈り取り後に慣行田を歩いて比べると、不耕起田の方がフカフカ・グニャグニャとなっている。これには不耕起田に入った方が皆、慣行田との違いに驚いている。稲作での栽培上の秘訣など取り立ててなく、苗代に前年の籾を蒔いて発芽させ、それを一本植などの疎植植えで行なっている。

自家採種の不耕起栽培で、ここ最近イネの姿も変わり、丈が非常に長くなり、収穫量も慣行田より多くなり、ここ３年間、慣行田を上回る収穫量である。２ヶ所の田んぼで行なっており、それが３年続いてきたわけであるから、こうした増収は単なるマグレや偶然ではないと考えられる。

春の草は除草せず、全く耕さず、代も掻かず、化学肥料も全く与えず、除草剤も使わず、はたまた機械も使わず、大げさに言えば人類が二千年かけてやってきたことと、全く正反対のことをやりながら、慣行田以上の収量があるとは不思議な限りだが、実際のところである。

エンジン付きの農業用機械、また電気に頼ることなく行なっているので、購入する石油等々の化石燃料はゼロ、排出するのもゼロ。（運搬に軽自動車を必要最小限使うので、五十歩百歩だと言われてもしょうがないが。）

まずは機械がなくとも、「おおごと」と言われる米づくりでも、こうした方法で実行可能だということを知ってもらえれば幸いである。さらに、このような小規模で機械を使わない農業は、さらにいろいろな可能性を以下のように持っていると、筆者は考えている。

既述のように経費があまりかからずに、安心安全な農産物がある程度自給できていること。このような食の安心・安全面、家計の節約・経済面。このほかに、農業という自然と一体の労働から得られる健康面や精神的な充足感をいつも感じ、ストレスなしということ。専門の農家のように、収益を考えなければならないことや、市場メカニズムや大規模農業から発生する様々なリスクや被害、これらは筆者のような小規模農業では全く無関係で、それらに振り回されないこと。小規模・小農だからこそ、これを活かした形で、経営やリスクから抜け出た本来的な農業が行なえること。一般市民・消費者のような非農家の方でも、農作業に興味があるなら、このような小規模農業での参加が可能だということ。筆者のようなエンジン付きの農業用の機械すら持ち合わせていない者であっても、米づくりも実行可能なのだから。

このような小規模の有利性・優位性・有益性を、筆者はスケールメリットならぬ、「スモールメリット」と呼んでいる。

さらに一般市民・消費者のような非農家の方がこうした小規模農業に参加し、それを発展させることで、次のような相乗効果が生み出せると筆者は考えている。化石燃料浪費の削減、排出される CO_2 の削減、温暖化の防止や、ゴミ問題の是正と生ゴミを資源としての有効活用。（当宅では生ゴミ等々はすべて肥料として活用しているので、ゴミという感覚はなく、資源と見ている。）これらは、生態系へと寄与し貢献していくであろう。実際に筆者の田んぼではトンボ・糸ミミズ・ドジョウ・タニシ・イナゴほかが繁殖しており、こうしたビオトープを保護する面からも、循環・共生型の社会・経済の構築が期待できる。

さらに現在特に荒廃している中山間地域に目を向けるとどうであろうか。中山間地域や棚田では農業用機械が搬入しにくく、元々が大規模農業には不向き、そして人口減少と、これらの関係・問題が以前から指摘されていた。が、しかし筆者のような機械を使わない小規模農業は、そうした問題の解決の糸口になると考えられる。

国連でも SDGs から小規模な農業を重要視す

る動きとなっている。と同時に、筆者は以上の観点から、かねてより農家ではない多くの方に、我々ができる「ハチドリの一滴」として、小規模農業をぜひやっていただきたいと、機会あるごとに訴えてきた[3]。

2. グリーン・ツーリズムとの関連

以上のように、実践活動を含めた自説・持論は、筆者の考えからすると、現在の農業問題、食料問題、環境問題等々、これらの是正に一市民・消費者の立場から実行できて、資するところが大きいものである。と、このように考え、各所で訴えてきた次第である。そうしたところ、今回以下見るように、筆者の大学での訴えから、大学生が小規模農業に参画したい、見学だけではなくて農作業を手伝いたい、このような申し出が多数出てきた。1・2名だけではなく、10名くらいがである。

このことに筆者はいささか驚いている。と言うのも、数年前ならば農業と言えば、関係者には全く失礼な印象操作とレッテル張りであったのだが、3K（きつい・汚い・危険）とか揶揄され、敬遠されることが多かった感がある。それが深澤［2014］でも述べたように、時代の雰囲気が変わってきたのか、農業参画の希望者が徐々に増え出してはいた[4]。とは言え、微々たるものであった感はある。しかし以下示すように、一気に10名弱の参画希望者である。それも20歳くらいの若者がである。何故、農業・農作業に興味・関心があるのか、それらは以下各々の方々の実際の言で伺うとして、数年前の上述の状況とは全く違って、ここまで多くの若者が興味・関心を持って参加したいというのには、驚かざるを得ないわけである。

こうした背景と経緯からして、彼ら・彼女らの情熱・熱意、そして自説・持論で訴えてきた非農家の農業参画、これらがまさに合致し合流してきた感がある。かつて筆者は「小規模であれ、それがやがて点から線へと、そして面へと広がっていくことによって」（深澤［2014］159ページ）、非農家の農業参画が広まっていくことを期待したわけである。それが徐々に実現しつつあることに正直驚きながら、感動している。

ではさてそこで、彼ら・彼女らの農業参画の方法として、果たしてどういった形態が最良なのか。思案を重ねた結果、今流行しているグリーン・ツーリズムの形が良いのではないかとの判断に至った。

グリーン・ツーリズムとはアグリ・ツーリズムとも言われ、援農や農作業を兼ねた体験旅行のことを言う。都会等々で農業に携わることができない方などに、地方・農山村に観光旅行を兼ねて訪れてもらい、同時に農業・農作業を行ない、逆に農家の方では農業を手伝ってもらうものである。まさに援農を兼ねた農作業体験旅行である。

上記大学生に、いきなり農業用機械を使わない過酷な農作業労働を強いることは無理であろうから、まさにアウト・ドア感覚で小規模農業や自然あるいは土に親しんでいくこと、これを最初の目的として、形態としては上記のグリーン・ツーリズムの形で取り組むことを、今回始めた次第である。その詳細は以下で示していくとして、一般的にグリーン・ツーリズムは、農山村に一定期間滞在する形で行なわれるものを言う。しかし大学生（東京ほかの首都圏在住）にはそれは不可能であるので、首都圏と筆者在住の山梨県との日帰り農作業で、それも一回限りで終わる形ではなくて、一年を通じ複数回来訪してもらう形を取った。これらは両者の合意である。と言うよりも、正確には大学生側の行きたい日の申し出に、当方が合わせたという形

[3] 特には、深澤［2014, 2021, 2022, 2023］を参照。

[4] 特には、深澤［2014］の第1・4章を参照。

態である。特に田植えや稲刈りなどは未だかつて体験したことのない者が多く、それを興味・関心の上からぜひ体験したいという方が多かった。それら年間の作業日程を話し、大学生が行ける希望日に、当日の天候と合わせて当方の方で予定が空いていれば、それに合わせたという次第である。

今回のグリーン・ツーリズムで得られた内容は、筆者と当事者である大学生、両者にとって大きかったと考える。その内容や詳細に関しては、当事者から以下直接語ってもらうとして、先に筆者としては、かねてからの自説・持論「非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業展開論」、これによって現在の農業・食料・環境問題等々の是正に貢献していくこと、この立論と実践活動のさらなる展開が提示できること、これに有益性を感じている。そしてこうした実証実験的な結果を考察していくべく、本稿をしたためた次第である。

では今回のグリーン・ツーリズムの詳細内容や当事者からの言を直接伺っていきたい。特には文学部チーム（女子大生２名）と、法学部チーム（男子学生２～３名）の言である。

その前に下記のグリーン・ツーリズムを行なうにあたって、事前に以下の確認を行なった。事前確認事項として、植物ほかのアレルギーの有無、虫・爬虫類・ミミズ等々への抵抗の有無。これらは当事者・上記大学生にはさしてないことを確認した上で、当宅に来訪して農作業に従事してもらった。

微に入るが、同様の活動を行なう方への参考までに、支出負担金・経費などに関しては次のとおりである。昼食代は当方が支出。交通費は、高速バスで新宿－甲府昭和間を移動となるので、往復一人 4,000 円。そのうちの 1,000 円分を当方が支給。よって実質一人 3,000 円くらいを当事者・大学生側が負担。逆に当方は、一回に２名の来訪であるから、昼食代を入れて合計約 4,000 円の支出となる。月数回の来訪回数となると、ある程度の支出負担となるが、既述の彼ら・彼女らの情熱・熱意と自説・持論との合致・合流、そして立論の展開面での有益性を尊重し、かような支出負担は良しとした。このようにまさに実証実験的に取り組んでみた内容が、以下のとおりである。

さらに追加して、いらぬ誤解を払拭しておく。当該大学生は主として当方の受け持ち講義の受講者であって、単位認定・取得後の来訪である。さらにグリーン・ツーリズムとは言え、あくまで「農業実習」という名称・行為で、基本的また趣旨的には大学での学習の一環として取り組んでもらう、このことを互いに了解してある。

ではその詳細と当事者の言を伺おう。（以下の学生諸子の言は、ゴシックで記載してある。本稿のためにいただいた文言は、文字・語句の統一・修正、句読点など、筆者が訂正した箇所もあるが、基本的には当事者の文面である。）

Ⅱ．グリーン・ツーリズムの詳細内容と当事者の感想

1．文学部チーム（女子大学生２名）

①目的・動機

まずは当事者の目的・動機から伺ってみる。

私は田舎生まれ田舎育ちですので、昔から田んぼや畑を見慣れていました。小学校の時から学校で稲作や芋堀体験をしていましたし、祖父母が小規模な農業を営んでいるので、その様子を間近で見ながら育ってきました。

しかし東京に来てからというもの、地方とのギャップに驚かされることばかりでした。都心の方では田んぼや畑を見ることはまず無いですし、そもそも自然自体が少ないなと感じました。それと同時に農作物の値段も東京ではびっ

くりするくらい高くて、必然的に野菜との距離が離れていきました。

そのような感じで東京で一年半過ごしていたのですが、二年生の秋学期に先生［筆者・深澤］の「経済学概論」の授業を履修することになりました。そこでご自分で農業をされていることを伺い、私も農業をやってみたい、もっと自然に触れたい、と思いました。

元々緑が豊かな公園に行くことが好きだったので（地元では吉野ヶ里遺跡によく行っていました）、一番の動機は「自然に触れたい」ということかもしれません。以前「もっと農業に携わっておけばよかった」と話しましたが、そのような思いがあったのも事実です。自分自身こんなにも自然が恋しくなるとは思わず、それまでは大変な農業と関わることをなるべく避けていました。実家にも小さな畑があり、トマトやキュウリなどの野菜を作っていたのですが、思ったより大変で、すぐにやめてばかりでした。

しかし東京に来てからは前述の通り自然があまりありませんので、これを機に農業活動を通して自然に触れる機会を得たいと思い、そこでダメ元で先生の畑を見学したいと申し出ました。（I さん）

農業体験を行いたいと思うようになった動機としましては、私は好奇心が旺盛な方なので、単純に好奇心からということがまずはあります。自分のやったことのないことをやってみたいという思いから、その中で農業体験もあまりやったことがなかったのでやってみたいなと思い、先生に声をかけさせていただきました。

それを前提として農業体験をしたいもう一つの動機として、日本の食料自給率の低下や人間にとって、生きていくのに欠かせない食べ物が商品化することで、安全な食べ物がいずれ高級品になってしまうのではないかという危機感を持っており、農作業を体験することで食に対する将来の選択肢を広げておきたいということもあります。

最後に、現代では利益を出すために何でもそうですが分業化が行われていることで、毎日食べているものもどのようにして作られているのか、全く知らないということも多くあります。目の前にある食事がどのようにして作られているのか知っておかなければならないという思いもあって、農業体験を行いたいと思いました。（H さん）

②グリーン・ツーリズム、農業実習の詳細

実際に来訪してもらった日にち、具体的な農作業ほかは以下のとおりである。

第１回（2023 年 2 月 13 日）

午前：味噌作り体験、田んぼの下見

午後：田畑の下見、ニンジン・ナガイモ・キクイモ掘り体験

持ち帰り物：味噌、米（玄米・白米）、ニンジン、ナガイモ、キクイモ、ジャガイモ、ブロッコリー、ほか

まずこの第１回目でだけ、当事者たちの感想を伺ってみた。

農業は大変なイメージはありますが、実際にやってみて楽しい面もあることが分かりました。

1．まず驚いた事なのですが、耕作地の広さに驚きました。二箇所連れていただきましたが、どちらも一人でお世話をするには広く、都会ではあの広さの敷地はまず確保できないなと感じました。

また、高速バスの入口のところに扉があり、そこに「道に動物が入るので扉を必ず閉めてください」との文言があったのを見て、そんな身

近に動物を感じることができるのが羨ましいと思いました。東京で動物と言えば犬や猫、それ以外の動物を見たければ動物園に行くしかありませんので。

そして、人柄の良さというのも山梨に来て感じました。私は生まれも育ちも福岡なのですが、福岡と東京の人のギャップというのを一番感じています。どちらかと言うと福岡は温和な人が多く、人助けの風潮もあるのですが、東京では他人に関心がなく無機質な感じがしています。

ですが、山梨の方は気さくに話しかけてくださり、先生のように「助け合い」の精神を持たれているのかなと思いました。

2. お米や味噌、じゃがいも、菊芋、人参など、ひと通り食してみました。

全て共通して言えることが、食材本来の味を味わっているということだと思います。人参は切った瞬間から香りがすごく、調味料を付けるのも勿体ないほど甘かったです。じゃがいもはポトフにしたのですが、とても甘くて、先生の仰っていたように栗のようでした。

味噌づくりの際に豆を食べさせていただきましたが、その豆がとても美味しかったことを覚えています。私は豆単体で食べることはあまり好きではなく、お正月の黒豆なども苦手なのですが、あの豆は何故かすんなりと食べられました。

その他、お米や菊芋、ブロッコリー、長芋もとても美味しくいただきました。ありがとうございました。（I さん）

1. 驚いたこととしては味噌の作り方です。まず、麹はよく耳にしますが、実際にどんなものなのか知らなかったので、何となくイメージしていたものと違って驚きました。匂いも少し独特な香りがして、よく麹は体にいいと話を聞きますが、麹について何も知らなかったんだなと気づかされました。またそれは味噌についても同様で毎日のように味噌汁として味噌を食べているのに、味噌がどのように作られているのかあまり知らなかったので、とても勉強になりました。

さらに先生の田んぼや畑は、農業の敵と言われるような雑草が生い茂っていたことが印象的でした。田んぼは写真でも拝見していましたが、何も知らずに見たら田んぼだとはわからないくらい普通のいわゆる「田んぼ」とは違っていて、冬でも雑草が生い茂っていて驚きました。これから暖かくなってくるとさらに草が生えてくると思うので、今後どうやって田植えを行うのか楽しみです。

2. そして畑に関しては田んぼよりも驚きました。田んぼは事前に写真を拝見していたため驚きは少し抑えられていましたが、畑は写真で見ていなかったこともあって、こんなに雑草があっても作物が育つんだと不思議に思いました。私は中学生の頃に職業体験で農家に数日間お邪魔したことがあり、そこで人参を収穫したのですが他の作物の畑でもそうでしたが、雑草はほとんどなく、土しか見えませんでした。しかし先生の人参が植わっているところでは雑草がたくさん生えていたので、どれが人参の葉かすぐには分からないくらいで、人参畑のイメージが変わりました。

それから長芋や菊芋を掘っている時に、たくさんのミミズがでてきたこともとても印象的でした。職業体験で行った農家で収穫作業をしていた時は、あそこまでミミズがでていたことはなかったと思うので、かなり違うのだなと思いました。そして普段農作業をやらないので、新鮮でとても楽しかったです。

3. 家族の反応としては、「農業体験を中学生の頃から興味を持っていたので、今回先生のご厚意に甘えて行かせてもらい、とても感動して帰ってきましたので、貴重な体験をさせてい

ただけたなと思い、感謝しております。」と母が言っておりました。（H さん）

第２回目以降は以下のとおりである。

第２回（2023 年４月８日）

午前：種籾の播種、籾殻燻炭作り

午後：同上、作物（以下のセリほか）の収穫体験

持ち帰り物：米（玄米）、セリ、ニンジン、ミョウガ、ウルイ、ノビル、ブロッコリー、アスパラガス、ほか

第３回（2023 年６月 17 日）

午前：田植え

午後：畑の収穫（以下キャベツほか）の体験

持ち帰り物：米（白米）、キャベツ、カキナ、ダイコン、ジャガイモ、タマネギ、オオバ、サニーレタス、ほか

第４回（2023 年８月３日）

午前：田の除草作業、夏野菜の収穫

午後：（室内で餅つき機による）餅つき、有機野菜の販売店見学、信玄堤の見学
（ちなみにこの午後の甲府での最高気温 36.4 度、エアコンなしでの室内気温 31 度以上）

持ち帰り物：米（白米）、梅干し、ニンニク、タマネギ、オオバ、ミニトマト、ショウガ、オクラ、ミョウガ、ほか

第５回（2023 年 10 月８日）

午前：夏・秋野菜の収穫、田の稲刈り・結束

午後：この日は町で大きな祭りが開催されたため、それに午後は参加

持ち帰り物：オクラ、カボチャ、トウガン、ナス、シシトウ、ほか
なおこの日は秋の観光シーズンで、中央高速道路が渋滞。そのため、行きに 30 分遅れ、帰りも３時間半から４時間の遅延。

③５回のグリーン・ツーリズム、農業実習を行なった感想

以上、実際に来訪してもらった日にち、具体的な農作業ほかは以上のとおりとして、ではこの五回のグリーン・ツーリズム　農業実習を行なった感想をしたためてもらった。以下のとおりである。

脱穀・選別まで完了したということで、大量に収穫できたようで良かったです。微力ながら農作業に携わった身として、私も嬉しく思います。

農作業を実際に１年通してやってみて、やはり慣れないと大変だということを感じました。田植えから収穫まで行わせていただきましたが、一つ一つの作業をとっても簡単にこなせるものではなく、体力が必要な場面が多かったように思います。

ただ、先生が報告してくださったように、稲の成長や大量の収穫を聞くと嬉しくなりますし、満足感があります。それは毎回の農場実習の日の一日の終わりにも感じるものです。私は普段は都心の人混みの多い中で暮らしていますが、農業実習に行った際は自然を感じることができて、毎回何とも言えない充実感を感じています。収穫物を得るということだけではなく、こういった心のケアということも、農作業をやる上での目的になっている気がします。

毎回いただく食材も美味しいですし、何より農薬を使っていないと思うと、より一層ありがたみがあります。スーパーで見る野菜はどれも

高いうえに、農薬が使われているのかもしれません。

私は地元ではいつも直産市場で野菜を購入していたのですが、それに比べるとあまりにも相対価値があっておらず、東京に移ってからは野菜をあまり購入していませんでした。

世の中に家庭で行なう小規模農業が増えれば、野菜はもっと手軽に手に入るものになると思います。

また、先生のお宅に行って、現代には無い江戸味を感じました。米や野菜、味噌、梅干しなどの自給自足やリサイクル精神、千歯こきなどの道具などが私にとっては物珍しく、貴重な体験をさせていただきました。また、スマホやエアコンを使わないというのが信じられませんでしたが、現代の人間がいかに文明の利器に頼っているのかを実感しました。

私はこの前出かけている際にスマホの充電が切れてしまい、どうしようもなかったことがありました。その時に、以前は私もスマホを持っていなかったが、難なく生きていけていたのに、どうしてこのように頼る生活になってしまったんだろう、ということを考えてしまいました。

農業実習の他にも、先日伺った際の地元のお祭りも楽しかったです。藤あや子さんにも会えて、とても貴重な体験でした。東京ではご近所さんと関わることが少なく、人が冷たい印象を受けましたが、山梨はそうでもなく、お祭りでもフレンドリーに接していただきました。その他、信玄堤を見られたことも非常に良い機会でした。私は教職を取っていまして、中高で社会科を教える可能性があります。その際、実際に信玄堤を見たという経験は、役に立つのではないかと思いました。

農業自体は体力も必要ですし、結構大変な作業だなというのは思いましたが、やりがいや充実感を考えると相対的にプラスのことが多く、これから小規模農業が流行るのではないかとも感じています。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。（Iさん）

まず、先生の畑に興味を持ったのは食に対する危機感があったからです。

日本の食料自給率は私が物心ついたときからとても低く、小学校の時から授業で習い、その状況は中学生、高校生、大学生になっても全く改善されず、同じことを教えられてきたことで、日本の食料自給率に対する危機意識がありました。

また、大学生になって堤未果『日本が売られる』を読み、種子法の存在を知りました。「作物」だけでなく「種」さえも作れなくなることの危険性を知りました。また種と農薬がセット売りされることも知り、食が巨大なビックビジネスになり、食が巨大企業に支配され、それをもし放っておくと、ある意味食を人質に取られてしまう状況を知りました。そしてそれは遺伝子組み換えなども行われたり、大量の農薬を使ったりと安全である保障もないことも知りました。

そこから食をちゃんと自分たちで押さえておかないと、何かあったときに大変なことになると危機意識を持っていた時に、先生は自分で畑で作物を育てて、しかも無農薬でそして機械も一切使っていないということを授業でおっしゃっているのを聞いて、そのアプローチでどのようなものができるのか、どのように農作業をしているのか知りたくなり、先生に先生の畑に行かせていただけないかお願いをしました。

先生の田畑にお邪魔して、農作業を体験してきて、感じたことは大きく四つあります。

1. 先生の田畑で一番驚いたのは田んぼです。雑草がたくさん生えていて、一度も耕していない。それなのに田んぼに入ってみると土が

ふかふかで、他の農家さんの田んぼと全く見た目も、土の硬さも違っていて驚きました。私は一度無農薬の農家さんの所にお邪魔したことがあるのですが、稲が雑草に負けてしまうことを心配していました。でも先生の所では稲は全く雑草に負けていなくて、そこがとても不思議に思いました。一般的な稲と先生のところの稲では全く大きさや、色が違っていて、とても驚きました。

また農作業の体験としては、自らの手で、稲を刈ったことがなかったので新鮮で面白かったです。また、稲刈りの時に学生の私たちは少し疲れて休憩をしていたのに、先生は休憩もせずに、行っていて先生の体力にも驚きました。

2. 普通、畑では虫は害虫として嫌われ、取り除かれるのに先生の畑にはたくさん虫がいて、歓迎されているところに少し驚きました。上記した無農薬の農家さんの所で、それは葡萄でしたが、そこでは虫が入ってこないように細かい網で覆っていたので、商品にするものだから虫を入れられないのか、でも先生の畑でとれるものがたくさん虫食いにあっているというわけでもないので、その点がどうなのか気になりました。

3. 無農薬の作物を作ることは人の身体にいいというだけではなく、環境にもいいということに気づいたのは、先生の畑にお邪魔してからでした。

生ゴミも畑に還元することで土の栄養となり、ゴミとして燃やされることもなく、環境に優しい。先生の畑にお邪魔するようになってから、生ゴミを燃えるゴミに捨てたり、水を下水道に流したりするときに、少し罪悪感を抱くようになりました。もし畑があったりしたらこれらを捨てる必要もなく、燃やして二酸化炭素を出すという環境に負荷を与えるどころか、栄養になり、自然に還元することができるのにと思うようになりました。そこから「ゴミ」に対する意識が少し変わりました。無農薬は人にも環境にも優しいことが、何よりもいい点だと思います。

4. 最後に先生からおすそ分けしてもらって、麹などを家で発酵させて、人生で初めて味噌を作りました。何か月かしてみてみると、たくさんカビが生えていて、先生から大丈夫とは言われていたけれど不安になりました。さらに何か月かすると味噌のにおいがして、そして開けてみてカビを少し取り除くと立派な味噌が出来上がっていた。自由研究みたいでとても面白かったです。当たり前ですが、ちゃんと味噌の味がして美味しかったです。

食は毎日絶対に関わるとても大切なものなのに、日本では蔑ろにされてきたように思います。そしてとても身近なのに「育てる」という面では自分から遠いもので、先生の畑にお邪魔して初めて体験したことや知ったことがたくさんあって、新鮮でした。知らない作物も多くて興味深かったと同時に、よく知っている作物もその成長過程や、どのように実っているのか全く知らなかったので、畑にある状態を見てとても驚きました。

先生から頂いた農作物はどれも美味しく、何より安心して食べられるということが一番うれしいことでした。家族と一緒に住んで居るため、家族も安全な食物を食べられることが嬉しかったです。（H さん）

以上である。これらの執筆の後、第6回目の来訪は以下のとおりであった。

第6回（2023年11月19日）

午前：備中鍬の使い方の実践、苗代作成の田起こし、天日干しの竹竿ほかの片づけ、麦の播種、サトイモ・ウコン・サツマイモの収穫

午後：キクイモ・ダイコンの収穫

持ち帰り物：米（白米の新米）、カボチャ、トウガン、サトイモ、キクイモ、サツマイモ、ダイコン、ハクサイ、ウコン、干し柿、ほか

2. 法学部チーム（男子大学生３名）

①目的・動機

１の文学部チームと同様に、まずは当事者の目的・動機から伺ってみる。

私が今回、先生の農業体験に参加させていただきたいと考えていることには理由があります。

一つ目といたしましては、私は、食物アレルギーとアトピーがあるため、幼少の頃からオーガニックの食品を食べる機会が多くあったことです。しかし、実際にスーパーで買い物をするとき、市販品に比べこのような食材は割高であったりするため、実際に自ら育てるのは、多くの労力や時間が必要であると思っていました。私自身も、有機栽培で作物を育てるのは農薬を用いるのに比べ、手間がかかるのではないかと思っていました。

二つ目の理由といたしましては、私の祖父から言われたことにあります。彼に農業の経験は恐らく無いと思いますが、もし完全無農薬のような農法を行えば、まわりの農薬を使っている農家との間で軋轢が生まれるのではないかという心配をしていました。例えば、無農薬の農場に集まる虫がまわりの農薬を使っている農場にも集まり、荒らしてしまうのではないかということなどです。

これらのことについて、先生の農場ではどのように行っているのか、先生自身や先生の著書などから様々な答えをいただきました。

一つ目の理由につきましては、無農薬でも多く作物が育つということがわかりました。写真で実際に確認しましたが、その育ち具合は歴然としていました。また、日本でその作物が不作であった年でも、反対に多く実っているという点は驚きました。

また、二つ目に理由につきましては、軋轢などはなく、むしろたくさん実った作物をまわりに分けているということでした。昔の人間達も農薬などは使わずとも農業を成立させていたことを考えると、先生の実際にやられていることは非常に説得力があると感じました。私自身は実際に農業を体験したことがありません。失礼ではありますが、今回いただいた機会を通じ、先生が仰っていたことなどを実際に体験することにより、先生が言っていたことが可能なのかを肌で感じてみたいです。（M さん）

以下に今回の農業実習に参加しようと思った動機をまとめさせていただきます。

私が今回、先生の農業実習体験に参加しようと思った理由は２つあります。

一つ目は、私は以前、大学のボランティアサークルの活動で何度か農業ボランティアをしたことがあり、農業についての関心があったことです。その中でも私は特に農薬の有無に関することに関心があります。農薬は農作物を病害虫から守るために使われる、農業生産性を向上する等のメリットがありますが、自然環境への悪影響、健康被害等のデメリットもあります。

このように農薬を使用する是非について、どちらかが正しいとは一概に言うことができないため、私は今現在、自分の考えをしっかり持つことができずにいます。この問題については実際に農場を訪れて、現場の様子を自分の目で確かめることで、より理解を深めることができると思い、先生の農業実習に参加しようと思いました。

先生の農場は完全無農薬で行なっていると聞いたため今回は農薬を使わなくても農作物を病害虫等から守ることはできるのか、人手や作業効率等の農業生産性についてはどのような現状

であるのか。この二つのことについて学びたいと考えています。

二つ目は、経済学Ⅱで扱ったマルクス経済学の講義を受講したことが、きっかけとなりました。講義を受けている中、「利潤・儲けとは何か、それはどのように生じるか？」という質問を先生が経済学Ⅱを受講している学生全体に投げかけたことがありました。初め私は利潤・儲けとは誰かが得をし、誰かは損をするものだと、授業終わりのリアクションペーパーに回答したと思います。

しかし、次の週の講義を傾聴し、私は貨幣・金額に焦点を当てるあまり、人が行う労働・付加価値生産という生産過程を見落としていたことに気がつきました。これは米作りを例にした説明で気づくことができました。1000 円で仕入れた籾を売る時は 60000 円で売ったから利潤は 59000 円であるという金銭だけの理解では、利潤・儲けその他全ての源泉である労働・付加価値生産の意義が見失われる。1 キログラムの籾（1000 円）が 60 キログラムの籾（60000 円）になるためには農作業という労働活動をするからこそ量的に増加し、価値が増殖する。そして、増殖した価値をお金という尺度で計るから 1000 円から 60000 円というようにお金が増えるという結果が現れ、それを販売することで利潤・儲けが生まれる。

ここから人間が行う労働が一連の結果を引き起こすものとなっているため、労働こそが全ての源泉であると考えられることを確認し、この視点こそが労働価値説であり、マルクス経済学が着目している点であることを理論的に講義では学べました。

この学びを経済学Ⅱの講義だけに留めず、他の場所でも活かせないかと考えていた時、M 君から農業体験に参加しないかと誘われました。講義では第一次産業である農作業を例にしてマルクス経済学の理論を学んだため、学んだことと非常に酷似しており、実際に農作業という労働活動・付加価値生産活動を体験することができ、学びを実践的に活かせる場だと考えたため、今回の農業実習体験に参加しようと思いました。（N さん）

②グリーン・ツーリズム、農業実習の詳細

こちらでの実際に来訪してもらった日にち、具体的な農作業ほかは以下のとおりである。

第 1 回（2023 年 3 月 22 日）

午前：味噌作り体験、田の下見

午後：田畑の下見、生ゴミ肥料の土入れ、キャベツほか播種、ニラ採種

持ち帰り物：味噌、米（白米）、ニラ、イチゴ苗、ほか

1 の文学部チームと同じく、まずこの第 1 回目でだけで、当事者たちの感想を伺ってみた。

農業体験を実際に行わせていただけるということで、とても楽しみでした。

今回は、まず始めに味噌作りを体験させていただきました。味噌といえば、蔵で発酵させるものを想像していましたが、実際には大豆を潰す作業から始まりました。機械ではなく農機具を使いほぼ手作業で行いましたが、体力のない私でも、あまり時間をかけずに行うことができました。

私の普段の生活は怠惰で、暇があればスマホをいじってしまうような生活です。しかし、実際に食物に触れる時は、時間を忘れることができ、何か癒されるように思いました。これは、農業に関わる魅力のように思いました。

次に見学させていただいたのは、畑。先生が、生ゴミや籾などを肥料として作ったものですが、土の色が、隣の畑と全く違うように思いました。稲も、色がより青く見え、大きさも違

うことに驚きました。昔生きていた人は、もちろん農薬など使っていないはずで、先生の農業により説得力を感じました。

午後はもう一つの畑へ。6a の畑で私たちが食べる多くの野菜を１年分以上栽培。実際に土いじりをさせていただきましたが、とても柔らかい。更々というよりは、中身はしっかりしているような感じでした。栄養の多い土を実際に肌で体感できた気がします。

実践していない私が言うのもおこがましいと思いますが、１日２時間の労働で行う。労働価値説の考えが見えてきたように思います。１日大変お世話になりました。ありがとうございます。（M さん）

今回、実際に農業実習を行ったことで、①労働の重要性、②農に関する問題・実態、この二つのことについて深く学ぶことができたと思います。

まず、①では味噌作り体験を通して、労働の重要性を実感いたしました。普段はスーパーで味噌が購入できるため、お金を払えば味噌が手に入るという錯覚に陥る可能性があることを、マルクス経済学では現代の主流派経済学に対して指摘している。この指摘は味噌を実際に作ったことで、もっともであると思う。味噌を作る生産過程（＝労働）がなければいくらお金を払ったところで味噌はできないからである。ここにマルクス経済学が提唱する労働価値説の意義があると思う。

次に②では実際に農地を訪れることで、農に関する諸問題・実際の状況を深く知ることができた。例えば農薬の有無。健康面を考慮するならば農薬は無い方がいい。しかし、農家は農作物を売ることで利益を出す必要があるため、虫等に食われてしまうと商品として売ることができない。けれども先生のように小規模且つ家庭内供給を目的として農業を行えば、無農薬で農業を行うことができているという事実を目の当たりにしたことで、農薬を使わないでできる農業という新たな農業形態の視点を得られました。

また、畑の肥料はお店で買わなくても、生ゴミが肥料の役割を担っていることは驚きを隠せませんでした。今回の農業実習で実際に目で見て知ることができました。生ゴミが肥料の役割を担うということはゴミの排出量を減らせる、肥料を購入しなくて済むため出費が抑えられる等一石二鳥であると思いました。

このように小規模家庭内供給・自給型農業は商品として売る利益目的で農業を行うのではなく、家庭内供給・自給を目的として行うため添加物等の心配をする必要がない。つまり、健康面において非常に安心できる点。次に農薬、添加物等が使用されず、尚且つスーパーで購入しないため、出費がある程度抑えられる点。さらに、小規模で農業を行うため肥料は生ゴミで賄えていることから、環境問題の是正にも繋がる点。これらが小規模家庭内供給・自給型農業のメリットであると私は考えます。

この農業の形態は非農家の方でも実践できるため私もこの農業実習（小規模家庭内供給・自給型農業の体験）をきっかけに農業に興味・関心を持つことができました。（N さん）

第２回目以降は以下のとおりである。

第２回（2023 年６月 10 日）

午前：田植え

午後：畑の収穫体験

持ち帰り物：米（白米）、キャベツ、ルッコラ、カキ菜、コカブ、ニンジン、ダイコン、山東菜、ニンニク、タマネギ、オオバ、サニーレタス、ほか

この第２回目からはＮさんに代わって、O

さんが来訪してくれた。彼の目的・動機は以下のとおりだそうである。

私は、農業と環境の影響に興味をもっております。例えば、生ゴミを加工して肥料とすることで、食料の確保と環境面での負担を減らすことの両方を達成するという、先生の手法は私にとって新鮮なものでした。また、農薬を用いずに生態系のバランスを保ち、虫による影響を受けにくくしていらっしゃること、雑草も堆肥にすることで、除草剤を使わないことなどにも取り組んでいらっしゃることを伺いました。

適切な規模で、周辺の環境をできる限り改変せず農業をしていらっしゃる、先生のもとで勉強させていただけたら嬉しく存じます。（O さん）

第２回目は両者（M・O さん）が感想を寄せてくれたので、以下のとおり記載しておく。

この第２回目は、田植えと野菜堀りを体験させていただきました。先生の不耕起栽培の稲は慣行田の稲と比べ、とても大きく、また色がより青く感じました。稲と言っても生きているわけで、農薬を撒かない先生の稲は、より元気で生き生きとしているように思います。

田植えは、テレビなどを通じて、見ていたこともありましたが、実際に体験するのははじめてのことで、農家の方の器用な手さばきから、最初は難しくとも慣れればすぐにできると、たかをくくっていました。しかし、稲が土になかなか刺さらない（先生の土が栄養があり、柔らかいのが関係しているのかは分かりませんが、転んでしまいました）のと、綺麗に並べることができない等、大変な思いをいたしました。とても、よい経験になりました。

野菜ですが、山東菜などの菜っぱ類、大根、人参などたくさんの野菜をいただきました。特にサニーレタスや、玉ねぎなどがしゃきしゃきしていて美味しかったです。また、驚いたことと言えば、代表例としてキャベツをあげさせていただきますが、非常に中身がしっかりしていることです。スーパーで普段買うものなどと比べ、非常に質量が多く、重さもけた違いでした。また、硬すぎず、ちょうどよい歯応えで美味しくいただきました。

今回は、田植えと言うことで、お手伝いができればいいなと思っていましたが、逆にお手数をお掛けしてしまう結果となってしまいました。すみません。また、是非農業実習参加させてください。ありがとうございました。（M さん）

先日は貴重な体験をさせていただき誠にありがとうございました。

先生の本や雑誌の記事を通して、田んぼのお写真を拝見していたため、それが目の前に現れた時は嬉しさを感じました。また、ボカシを作って肥料を作る様子や、なめくじや魚のいる生態系が保たれた田畑の様子も文章を通して存じ上げてはいましたが、実際に自分で見て、においを嗅ぎ、手で触ってみることはやはり別で、とても鮮烈でした。

中でも印象が変わったのは、稲の手植えです。日頃住宅地の中で離れて暮らしている私にとって、田畑は風光明媚の象徴であり、とにかく優雅で俗世間からかけ離れた場所である感覚でした。ただ、実際に田植えをしてみると腰を深く落として、土の奥に苗を挿し込むことが想像以上に難しく、田畑は単に優雅な場所である以上に、人の営みや努力によって美しさが保たれている場所だということに気がつきました。

そして私たちに美味しい野菜とお米をくださりありがとうございました。先週の報告に続いて、タマネギや水菜、大葉、キャベツなどをいただきました。いずれも新鮮で程よい歯応えが

あり美味しかったです。特に大葉は芳しかったです。そのまま口に含むとさわやかな風味を感じました。後から刺身ともにもいただいたのですが、魚の存在感に負けず、上品な味わいに仕上がったことを覚えています。

また、お米もとても美味しかったです。炊き立てのお米を掬うと、普段よりもずっしり重みがある感覚でした。口に含むとしっかりとした食感で自然な甘味が広がりました。他の田んぼのものよりも太く丈夫で栄養のある、苗の様子が思い出されます。

今回の体験を通して、自然や人間の安全に配慮した有機農法の大変さ、そして素晴らしさを自分なりにですが、感じとることができました。

改めてこのような機会を与えてくださり誠にありがとうございます。（O さん）

第 3 回（2023 年 10 月 29 日）

午前：脱穀、ふるい分け、選別

午後：上記の続き、畑の収穫体験、精米

持ち帰り物：米（白米）、カボチャ、ナス、ダイコン、サントウサイ、トウガン、シシトウ、チンゲンサイ、ほか

③２～３回のグリーン・ツーリズム、農業実習を行なった感想

こちら法学部チームでの実際に来訪してもらった日にち、具体的な農作業ほかは以上のとおりとして、では文学部チームと同じく、この 2 ～ 3 回のグリーン・ツーリズム、農業実習を行なった感想をしたためてもらった。以下のとおりである。

今回は、脱穀作業の機会を頂きありがとうございます。東京でも市民農園などは流行っていますが、田んぼでお米を収穫できるようなところはほとんど無く、とても貴重な経験になりました。

今回は、田植え・稲刈りが終わった後の脱穀の作業をやらせていただきましたが、以前体験させていただいた田植えの作業と比べて、とても大変で苦労する作業だと思いました。まず始めに、お米を足踏み脱穀機で脱穀する作業ですが、リズムに乗るのが難しかったのですが、慣れていくと少しずつテンポ良くできていたのではないかと思います。一方で、長い間同じ作業を続けるため翌日ふくらはぎが痛み、足を何回も吊ってしまいました。

その後、脱穀したものを手で籾とワラに振り分ける作業を行いましたが、昔はこのように手作業で行っていたということを、実感しました。

その次には、唐箕を使ってさらに選別を行いました。昔の道具なので、正直言うとどこまで選別できるのか半信半疑でしたが、風力を用いて籾殻や草の部分がおもいっきり吹き飛んで行ったのは驚きでした。その時々の風向きを利用する知恵は、今でも役立つので、当時からすれば何とも無いことでしょうが、やはりすごいの一言です。

日本は、島国で他の地域にはない独特の文化がありますし、何より四季があるので、それを上手く利用してきた事は、とても誇りに思います。私も、先生のように自給自足で完結した生活を送ってみたいと思います。

また、前回体験した、田植えと比べて、今回の脱穀の作業の方がより大変に思いました。今年は異常な気候変動で、10 月・11 月でもとても暑かったというのもあります。田植えは、同じ作業を続けていくため、少しずつ上手くなっている感じがあり、達成感を感じやすかったです。一方で、脱穀はより体力を消費するため（手足共に）とても疲れてしまいました。「働かざる者食うべからず」まさに、この言葉そのものだなと思いました。労働価値説を肌で

感じました。いつも、新しい経験をさせていただきありがとうございます。

今までは、受け身で色々教えていただきましたが、次からは是非先生の足手まといにならないよう頑張りますので、ご指導よろしくお願いします。（M さん）

以下は O さんの言である。参加の理由ほか小見出しを付けて書いてくれた。以前と重複する場合もあるが、再確認も込めて、そのままの掲載としてある。

参加の理由

私が今回農業実習に参加させていただいた理由は主に２つあります。

１つ目としては、以前私自身が稲を育てる経験をしたことがあったことです。小学校の授業で稲を育てる体験学習では、一人一つのバケツの中に入れた土に稲を植えて育てました。初めての体験であったことや、十分な知識を持っていなかったこともあってか、そのとき稲は十分に育たなかったのです。しかしバケツではなく、実際に田んぼで育ててみることに興味をもちました。

２つ目としては、私の亡き祖父が有機農法に親しんでいたことです。彼は私が幼いころ自分の畑で育てた野菜を分け与えてくれたのですが、美味しくて安全な野菜がどのようなプロセスを経て成長していくのか、ということに関心がありました。

そのような中で、ありがたいことに友人から先生の実習のお話を伺い、実際に有機農法の流れを体験しながら学ばせていただくことができました。

実習を体験して

まず一回目の実習の最初に、米ぬかが保管されている倉庫に案内していただいたことが印象的でした。

その際先生は、米ぬかから「ボカシ」と呼ばれる肥料をつくることができることを教えて下さりました。「有機農法は環境にやさしい」という漠然としたイメージはあったのですが、肥料までも再利用することができるというのは私にとって大変新鮮でした。

そのあとは、先生の田んぼに案内していただき、田植えをさせていただきました。その時にトラクターで耕された田んぼと先生の不耕起の田んぼの両方に入らせていただいたのですが、土のやわらかさの違いに驚きました。先生の田んぼ土は、とてもやわらかかったです。

また、先生の田んぼの苗もより丈夫でした。農薬や化学肥料を使わずに作物が育っていくのかという疑問があったのですが、そうした心配は実習を通して無くなりました。

田植えは、腰を落として土の中に手を深くうずめる必要があるため、続けて行うことは大変でした。しかしこうした一つ一つの手間が収穫につながることを考えると、大変充実した時間でした。

二回目の実習では、成長して収穫されたあとの稲の脱穀と選別を行いました。稲は通常の田んぼで育ったものよりも丈が長く、太かったです。脱穀は足踏み式の脱穀機を用いて行いました。また選別においては脱穀された稲をふるいにかけて、そのあと以前から使われている唐箕をつかってさらに細かい区別を行いました。いずれも手作業で思うように進まなかった場面もありましたが、後半ではある程度のコツをつかんで無事に作業を終えられました。

私たちが普段口にする農作物は、生産者の方が働いてくださっているからこそ、つくられていることを実感しました。

また、先生からはお米をはじめ多くの農作物をいただきました。お米は、自分が田植えをさせていただいたものだったのですが、あまりの

美味しさに驚きました。一つ一つにしっかりとした粒立ちがありました。また、野菜もルッコラ、チンゲンサイ、ナス、大根などたくさんのものをいただきました。それぞれの野菜にしっかりとした歯ごたえがあり、今までの野菜で感じたことのなかった「旨味」を感じました。農法の差はこのようなところにまで現れるのか、ということに驚かされました。

おわりに

今回の農業実習を通して有機農法では、安全で、美味しく、天候の変化にも強い農作物を育てることができることを知りました。また、肥料も再利用でき、環境への負荷も少ない素晴らしいといったメリットも感じました。

一方で全身を使った作業も多かったため、大量生産のための普及は難しい、という課題も理解ができました。そのような中では、先生が実施なさっている農業実習の取り組みは、大変有意義なものであると言えます。私が感じた有機農法の魅力を、もっと多くの方に知っていただきたいです。

そしてこのような素晴らしい体験をさせて下さった先生に、改めて感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。（O さん）

以上が文学部・法学部チームによる、それぞれのグリーン・ツーリズム、農業実習の詳細内容と当事者の感想である[5]。

Ⅲ．グリーン・ツーリズム実証実験の結果考察

1．謝辞

こうした新しい実証実験として、まさに筆者が自説・持論として提唱していた非農家による農業参画、これを実践すべく農業実習を通じたグリーン・ツーリズム、自説・持論がかような形態で発展・展開していったことに関して、参加してくれた彼ら・彼女らに筆者から、この場

[5] このほかに、農学部チームも一回だけであるが、やはりグリーン・ツーリズム、農業実習に参加した。彼女らの動機に関しては以下のとおりである。

私達は農学部ですが、実際に有機農業を主として行なっている圃場を見る機会は今のところありません。そのため動機としては、そのような畑がどのようなものなのか見てみたいという気持ちがあります。また、自分が実際に生産に関わっていて、農薬を撒かなかったために害虫に作物を全滅されてしまうことも経験しました。肥料不足のために実が全くならなかった作物もありました。［引用者注、以下の箇条書きのとおり。］なので、先生の畑ではどのようにして有機農業が成り立っているのか関心があります。実際に農業を体験することで養うことのできる力もつけたいと考えております。

・ハウスで育てているトマトがオオタバコガに食べられてしまった
・路地圃場で育てているサツマイモが何にやられたかは分からないが、気がついたら葉がボロボロになっていた
・肥料不足についてはサツマイモが大きく育たず、実が細い
・畑で育てていたトウモロコシの葉などは立派だったが、実はそんなに大きくならなかった（A さん、T さん）

一回のみ行なった内容は以下のとおりである。

第 1 回（2023 年 10 月 1 日）
午前・午後：田の稲刈り・結束
持ち帰り物：白米、オクラ、カボチャ、トウガン、ナス、シシトウ、ニンニク、タマネギ、味噌ほか

これらに関して、彼女らからの感想は伺えていない。

をお借りして感謝申し上げる次第である。また同時に大変な農作業・重労働を行なってくれたことに、「お疲れさまでした」「ご苦労さまでした」と申し上げるところである。

さて、今回かくのとおり農業実習を通じたグリーン・ツーリズムの実証実験に関して、参加当事者・学生諸子の動機から感想報告は上記のとおりとして、主催した筆者から結果考察をここで行なうべきであろう。

それは以下のとおりである。

2. 考察①【筆者が見落としていたこと】

まず、上記Ⅱで示した参加当事者である学生諸氏らの動機から感想報告に関して、例えば当方から持ち帰った農産物の味ほか等々に関して、いささかの誉め言葉ぎみの文言・表現もあったが、それは有難い思いやりとして斟酌しておきたい。それはそれとして、上記の感想報告は筆者にとって誠に意義あるものである。

とこのように言うのも、彼ら・彼女らの感想報告は、筆者からすると全く予想しないものが多く含まれているからである。この農業実習を通じたグリーン・ツーリズムによって、参加者である彼ら・彼女らにとって、大きな気づきまたは発見が多々あったことは、上記のⅡで示した当事者からの感想報告で、本稿一般の読者においてもよく知れるであろう。それはもちろんとしても、それらの気づきや発見また感想は、当方からすると予想していないことばかりであった。

例えばそれは、いくつか羅列する限りでも、地方の人の温かみ、生ゴミほかを肥料として再利用、持ち帰り農産物の新鮮さとおいしさ、労働価値説との接近性・親近性、農作業労働の肉体的大変さ、これらはこちらからすれば当たり前のこととして、また他と比較すらしていなかったことである。

それらについて彼ら・彼女らが指摘してくれたということは、こちらとしては当然のことに気づかされたということで、大きな発見と啓発であり、また収穫である。本稿の２において、「今回のグリーン・ツーリズムで得られた内容は、筆者と当事者である大学生、両者にとって大きかったと考える」と述べたその理由は、まずここにある。

3. 考察②【座学では得られない気づき・発見、思索・見解の発露】

関連して、彼ら・彼女らにすれば、いわゆる座学では得られなかったことが収穫できたのではないかと、こちらからは考えている。その具体的なものとしては、上記羅列したこと以外にも、以下の点が挙げられよう。

自然に触れることの大切さ。自然・環境や雑草・虫などの生物多様性との共生。日本の食料自給率の低さ、戦争、そして猛暑から生じた昨今の農産物価格の高騰。そこから気付かされるある程度の自給体制の必要性や重要性、そしてその確保。農作業労働の必要性と、逆に手作業でそれを行なう大変さ。そしてまたそれをやり抜いた後の達成感・充実感・満足感。さらに逆な面での、やりがい・おもしろさ。収穫の喜び。付加価値を加えることの実践と体感。有機農業の可能性と、農薬を使用することの再考察。購入化学肥料一辺倒的依存の再考察。小規模農業の利便性と可能性。そしてまたその発展と展開の再考。再利用・リサイクルの実践・実行と、循環・再生産の重要性、加えてまたその効果。農作物の成長過程を見ることの必要性や充実性。市販の購入野菜と手取り収穫野菜とのかなりの違い。書物以上に気付く慣行農法と当方での農法との違い。それによる農作物と味の違い。こうしたところである。

これらは実際に田畑に足を踏み入れて、農業を体験・実践してみなければ、決して得られないことばかりのものであって、繰り返すが、書

物や座学では体感・吸収できず、そこからは生まれない気づき・発見、そして思索・見解の発露であると、このように筆者は考える。しかしながらかくのとおり実行・実践し、そして各々上記の体感と実感を得たということからも、改めて今回の農業実習を兼ねたグリーン・ツーリズムによって得られた内容は、筆者と当事者である大学生、両者にとって大きかったと考えている。

上記羅列した各々のことは、既述のように、書物や座学では得られない、そこからは生まれない気づき・発見、そして思索・見解の発露であり、同時にこれらは言わばお金では買えない気づき・体感等々でもあったと、筆者からすれば考えている。

4. 考察③【本来的農業の再考】

この点に関してさらに深堀して考察していくと、以下のことが言える。上記羅列した各々のことは、振り返れば数十年前には当たり前のように、各農家あるいは非農家でも行なっていたことである。農家でない非農家であっても、小規模な農地を借りて行なっていたことであって、筆者にも幼少の頃の思い出として、そうした記憶がある。

しかし時代が進むにつれて、社会全般にある程度の野菜・米を自給することから離れ、市販のものをお金で購入するようになっていった。非農家であっても、生産することから離れ、購入して・買って済ますようになり、言わば商品・貨幣経済にどっぷりと漬かるかのようになっていったわけである。土から遊離してしまったとも言える。

さらには日本全体でも、安く農産物を入手すべく、外国産のものに、つまりは輸入に依存しながら、食料自給率が低下していったこの日本全体の状況。しかし今回の戦争、石油の値段の高まり、そして猛暑、これらによって野菜をはじめとした農産物ほか、様々な製品の物価上昇に苦しんでいるという、昨今の状況。

専門の農家でも、収益性の面から大量に生産するという課題、そして手作業による農作業の重労働からの回避等々から、肥料や機械の購入が必然・当然のものとして必要とされ、それに依存し、また営利・採算性の問題が大きく付随するようになっていった。これもまた商品・貨幣経済への依存である。と同時に、利益・採算性を考慮すれば、ある程度虫食いなどない見栄えの良い農産物にしていかなければ、消費者から購入されない。となると、農薬等々の使用もやむを得ないこととともなる。これらが現在一般的に行なわれている慣行農業であって、機械・化学肥料・農薬・除草剤を購入し、それを使用していく背景と内情である。

ここでこうした慣行農業と、筆者と学生諸子が行なった家庭内供給的小規模農業、この二つを改めて対比させて再考してみたい。筆者の場合、上記現在一般的に行なわれている慣行農業とは全く違って、機械・化学肥料・農薬・除草剤を購入し、使用していくものではない。さらに筆者らの場合、営利ではなく必要部分の自給。そして余剰部分の農産物は、安心・安全な米・野菜などは特に、他者へと提供。Ⅱで示したとおり、援農のため訪れた学生諸子には、持ち帰ってもらったことで喜ばれた。

このような広く言えば食を通じた支えが、筆者の家庭内供給的小規模農業の場合、本来的なものとなっている。近頃の言葉で言うと、それは支え・支えられ、互いに支えあっていく共助に近い。そうした意識・感覚が基本にあって活動している。実際に筆者らの場合、他の農家と足りない種・苗・収穫物などを分かち合って、互いに支え合っていることしばしばである。

ここで重要なのは、本来的に見た場合、こうした食などを通じた互いの支え、これこそが農業の基本と根幹であり、本来の姿であったはず

である、という視点である。そうした農業と食を通じた互いの支えは、慣行農業が対象とせざるを得ない既述の営利等々、それ以前の課題と対象だったはずである。

そこからさらに加えて言えることは、筆者らのような小規模農業にはそうしたことができていくということである。市場・価格メカニズムに乗った営利目的、経営的な思考・行動原理ではなくて、逆にそのような行動原理からは全く離れ脱却したかのような本来的な形での農業、これが家庭内供給的な小規模農業には可能だということである。さらには市場・価格メカニズム等々とは別の、食を通じて支え合う、本来の姿の農業が可能なのである。これに再度加えられるのは、上記羅列する形で紹介した数々の喜びと素晴らしさを体感できる労働が、小規模農業を通じて行なえるということである[6]。

こうした視点から再び考察すると、今回の農業実習を通じたグリーン・ツーリズムを行なって、学生諸子には既述のような座学では得られない、あるいはまたお金では買えない、農業本来の課題等々、様々なことに気づき、習得できたと考えている。

ここでいったん総括しておくと、このような市場・価格メカニズムの原理や商品・貨幣経済に乗っていかない本来的な農業、これが実行可能である家庭内供給的小規模農業、その家庭内供給的小規模農業は今回のようなグリーン・ツーリズムを実行可能としていく多様性・多機能的意義、これらをも合わせ持っていることが今回知れた。こうした側面からも、筆者提唱の家庭内供給的小規模農業の有益性を本稿で改めて提示したい。

そしてこのようなグリーン・ツーリズムを通じた形であれ、あるいはどのような形態であれ、筆者がかねてからの自説・持論であった、上記示した家庭内供給的小規模農業が、非農家の農業参画を通じて広まっていくことを希望しながら、再度本稿にて提唱するところである。

5. 考察④【今後の課題】

補足して、上記では有益性や優秀性に重点を置いて示したが、それとは逆の一面や今後の課題などを同時に考察しておかなければ、片手落ちであろう。それについては目下以下の問題・課題を指摘しておきたい。

何しろ一番の問題・課題としては、こうしたグリーン・ツーリズムを通じた非農家の農業参画には、継続性の問題・課題があるという点、これを今考慮している。つまりこれが一過性のものとして、一回や数回だけ、あるいは一年・単年だけのものとして終了したのであると、単にそれだけのものとして終わっていくこととなる。

と言うのは、筆者以外でもさらに実際の自身の農地を持つ農家の大きな課題は、単に一年だけではなく、生涯農地と向かい合っていかなければならないという、大きな課題・問題がある。グリーン・ツーリズムとして観光を兼ねて、一回や数回だけの体験では、農作業を手伝ってくれたことへの感謝はもちろんあるものの、それとは別に一回や数回だけのものであるならば、やはりいわゆる遊びやそれに類したものなのかと、専門の農家からはいぶかしがられることはありえる。そうした単発・浮遊的な遊び心的なものとは違って、上記農家は繰り返すが、生涯農地と向かい合っていかなければならないのである。一年だけの完結ではないのである。

筆者あるいはグリーン・ツーリズムを引受ける農家は、援農に来てくれた者への感謝をもちろん当然持つ。筆者にしても、述べたように、上記羅列した数々の有意義性を学生諸子らと共

[6] これらに関しては、深澤［2022］で詳述してある。

有できた。そして家庭内供給的小規模農業の有益性・有効性を改めて汲み取った。ただそれらが、上述の課題・問題からして、一時的・当該年度的な単発・浮遊的なものとして終わってしまっては、それだけのこととなる。しかしながら援農者に来年も絶対来るようにとの、強制はこちらからしてできないわけである。彼ら・彼女らにはそれなりの事情や都合がある。ましてや季節的な出稼ぎ労働者のように、毎年あるいは長期に渡って、彼ら・彼女らの支援を、それも無償で期待することはできない。

ここが問題・課題となろう。既述のとおり、専業の農家になればなるほど、大きな自家所有地を持ち、さらにその農地と生涯向き合っていかなければならないわけであるから。グリーン・ツーリズムとして一時的・当該年度的なものとして終わっていくのであれば、それはそれで終了で、あとは再スタートとなる。上記のように、季節的な出稼ぎ労働者のように、毎回毎回誰それの援農や支援を、無償で期待することはとてもできないであろう。

筆者が先に継続性の問題・課題があると指摘したのは、こうした意味合いからである。これをいかに長期的に、そして互いにより実りあるものにしていくか、これが今後の課題ではないかと今思索している。

終わりに

ともあれ、こうした今後への課題は当然出て来るものである。完璧な事象は無いように、逆に課題があるからこそ、それを解決・使用するべく事象は弁証法的には発展・展開していくとも言えるのである。

ここ終わりに、まとめて総括していくが、今回こうした新しい実証実験として、まさに非農家による農業参画、また農業実習を通じたグリーン・ツーリズム、それによって得られた内容は、再度の繰り返しだが、筆者と当事者である大学生、両者にとって大きかった。数々の有意義性を互いに共有できた。

さらに、筆者のかねてからの自説・持論であり、実践活動でもある、家庭内供給的小規模農業はグリーン・ツーリズムへと発展・展開させていくことができていくという、有益性・有効性を改めて汲み取った。こうした面からしても、同時に筆者のかねてからの自説・持論である非農家の農業参画、これが拡大しつつある。それらについて、今回の学生諸子の活動・行動から実際に知ることができた。これに関する今後の課題は、継続性という点であった。

筆者の自説・持論としてのこうした非農家の農業参画による家庭内供給的小規模農業の展開が、さらに拡大・発展していくことを一層望むところであって、そのための考察や方途・方策について、さらに思考・彫琢していく所存である。

引用文献

深澤竜人［2011］「家庭内供給的小規模農業展開論―半農半Ｘの実態経済分析Ⅰ―」『経営情報学論集』第17号。

――［2012］「家庭供給的小規模農業展開論（実践的環境経済学）を巡る議論―半農半Ｘの実態経済分析Ⅱ―」『経営情報学論集』第18号。

――［2014］『市民がつくる半自給農の世界―農的参加で循環・共生型社会の構築を―』農林統計協会。

――［2020］「国連の「家族農業の10年」「小農の権利宣言」と家庭内供給的小規模農業展開論―家庭内供給的小規模農業展開論Ⅲ―」『山梨学院大学経営学論集』第1号

――［2021］「半自給農は楽しくておいしい脱炭素化への道」『季刊地域』No.45。

――［2022］「半自給農の思想・意識―「労働価値

説」・「自然との物質代謝」と合わせて―」エントロピー学会『えんとろぴい』第83号。
――[2023]「『スモールメリット』を活かした循環共生型・不耕起イネづくり」『季刊地域』No.53。